NOW IS.

宮城は現在(いま)も
現実(いま)に
立ち向かう。

Vol. 20
December, 2017
ナウイズ
毎月11日発行

in 松島・利府

本間秋彦

撮影地：松島湾

自分は ちょっと後ろで 背中を押す係。

語り部クルーズにて
語り部の鈴木丈洋さんと

宮城にいるタレントだからできること。本間秋彦さんとにぎわいの松島・利府を歩く。

島巡りを楽しみながら被災体験を聞く

日本三景・松島。大型バスが乗り付け、この日も多くの観光客が訪れていました。今回は、タレントの本間秋彦さんと一緒に、松島湾に面した松島町と利府町へ。宮城県の情報番組やラジオで毎日のように顔を見る本間さん。「松島にはこの前買い物に来たよ。すごくおいしい海苔が売ってる店があってさ」と軽快に話します。

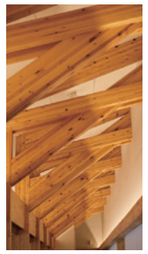
松島で観光と言えば、大小さまざまな島を巡る「島巡りクルーズ」が人気ですが、この日は、観光船の上で震災を経験した鈴木丈洋さんのガイドで「語り部クルーズ」を体験しました。「島々が波の威力を弱めてくれたので、ここはほかの地域に比べて軽微な被害でした。震災後は『松島から宮城復興ののろしを上げよう』と1カ月後の4月29日から観光客の受け入れを始めました」。うなずきながら耳を傾ける本間さん。「これまでたくさんの地域に行ったけど、被災の状況は全部違う。いろいろな語りを聞いて、番組で話したい」。

「私はすぐに観光客の方と瑞巌寺に避難しましたが、真っ黒な津波が島を乗り越えるのが見えたそうです」と鈴木さん。

震災を経た宮城で一緒に歩き続けること

次に訪れたのは、湾を見下ろす高台にある「石田沢防災センター」。災害時は建物内に450人、駐車場に2000人を収容でき、平常時は会議やイベント会場として使われます。太陽光がたくさん入る木造の建物。大きな備蓄倉庫や耐震性貯水槽、自家発電設備を見ながら「これは知らなかったなぁ」と本間さん。「これから地元の人が集まる場になったらいいよね。いつも行ってれば、いざという時あそこに逃げるんだ！ってすぐに観光客の人を誘導できるから」。

縁側を広くとったり、仕切りやすい部屋割りにしたり、大人数が避難することを想定してさまざまな工夫をしています。



最後に一行は平成29年の夏にオープンしたばかりの「MOLA MOLA CAFE」へ。海が見える場所にカフェを開きたいと、オーナーの末永統海さんがあちこち探し回ってようやく開店させました。「毎日きれいだなぁって海の写真ばっかり撮ってます。地元の人も、遠くの人もコーヒー片手に海を見て、話したり本読んだり、好きに過ごしてほしいんですね」と末永さん。本間さんも「お年寄りがカフェにいるのかっこいいからなあ」とうなずきます。

震災後、避難所の人が楽しく運動できるようにと、方言のラジオ体操を作り、あちこち回っていた本間さんですが、「被災した人たちに寄り添うっていうのはちょっと違うと思ってる」と話します。「ぼくは石巻の実家を流されたから、家を流された人の気持ちは分かるかもしれない。でも、家族を流された人の気持ちは、きっと本当の意味では分からない。だから簡単に、気持ちに寄り添うって言いたくないんです。自分の役目は、ちょっと前か後ろにいて、ここおもしろいから来てみなよ、って言うとか、元気出してよって背中押すとか、そういうことだと思ってる。いつも地元にいるタレントとして、そういう立ち位置にいたいと思ってます」。

沼田佐和子

海のそばだからできることをしたいと末永さんは熱く語ります。

PROFILE

本間 秋彦
ほんま　あきひこ

1961年、宮城県牡鹿町（現石巻市）生まれ。宮城弁のラジオパーソナリティとして人気を集めるほか、テレビの情報番組で長年司会を務める。震災後は、宮城の方言でラジオ体操をする「おらほのラジオ体操」プロジェクトに参加し、話題を集めた。

a walk this town !

この街の“今”を探索

松島湾「語り部クルーズ」

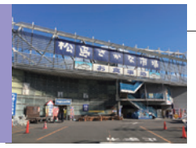
松島町の遊覧船は、東日本大震災の1カ月後には運航を再開。震災の伝承や防災・減災の想いも込めて平成23年11月から「語り部クルーズ」が行われています。船の乗組員が語り部として、震災時の状況などを話します。

石田沢防災センター

松島町には、災害時に住民や観光客の避難・救護活動の拠点となる防災・避難施設が14カ所整備されました。平成29年4月に開所した石田沢防災センターは、町内最大の施設で駐車場まで含めると最大約2000人が避難可能。平時は無料休憩所や交流拠点となっています。

MOLA MOLA CAFE

「海を身近に感じる場所を」とオーナーが4年前から県内を探し回り、平成29年7月9日、利府町の浜田地区にカフェをオープン。松島湾を望む小さな入り江のほとりに佇む店は、まさに海辺の隠れ家といった雰囲気です。



松島さかな市場

遠洋マグロ漁業をしている創業明治15年の株式会社臼福本店が平成9年にオープン。産地直送の魚介類や海産物販売、食事処もあり、観光客でにぎわっています。震災時の写真などを展示し、風化防止や伝承に努めています。

宮城県総合運動公園（グランディ・21）

東日本大震災では、救援活動の拠点になった施設。公園内にある「ひとめぼれスタジアム宮城」は、東京オリンピックのサッカー競技会場の一つとなり、山元町で生産した「復興芝」が使われます。

松島町（西行戻しの松公園からの眺望）

Support Power

the 応援職員

NOW IS. 利府 Rifu

PROFILE

利府町 震災復興推進室 事業推進班

松下 敏（まつした さとし）さん

宮城県より派遣（鹿児島県出身）

復興の一助になれたら。

浜田漁港、海側の防潮堤。

防潮堤整備が進む浜田漁港

「利府町の沿岸部は、特別名勝松島の指定地域です。景観に配慮して、海側からのコンクリートは擬石（人造石）の模様を採用しています」。と話す松下さんは、鹿児島県出身。東京に就職し、転勤で宮城へ来ました。上下水道の設計や施工管理のコンサルティング会社に所属していましたが、宮城県の任期付職員の募集を見て、少しでも復興の力になれたらと応募。平成25年に採用され、利府町に派遣されました。

松下さんの担当は、浜田地区の復興事業。防潮堤や避難施設、防災備蓄倉庫などの復興に関わる施設の整備事業を民間業者に発注し、その後の施工監理を行っています。

現在、浜田漁港は防潮堤工事の真っ最中です。工事を進める上で苦労も多いと話す松下さん。「浜田地区は地盤が柔らかく、強固にするために地中に杭を打ち込んでいます。また、西側の防潮堤は、当初、陸側から工事する予定でしたが、クレーン車などの重機を搬入すると地盤が沈んでしまうことが懸念されるため、海側から作業船で工事をすることに。ところが水深が浅いため作業船が入れず、底面を浚って土を取り去ってから着手となりました」。

当初、「防潮堤で海が見えなくなるのでは?」と不安の声がありました。防潮堤と同じ高さの看板を3カ所設置し、イメージしやすいようにしたり、図面を配布したり、要所要所で説明会を開きました。「住民のみなさんに協力をいただき、理解を得ながら工事を進めています」と話す松下さん。「浜田地区には漁港周辺に、マリーナが4カ所あります。防潮堤の陸側と海側を行き来するためのゲートを作り、使いやすいような設計も。ゲートは電動なので、緊急時にすぐ対応できるよう、遠隔操作になる予定です」。

松下さんの任期は平成30年3月までです。「あっという間の5年でした。3月まで滞りなく作業を進め、引き継いでいけたらと思っています。今後、任期付職員の募集があれば、再度応募したいと思っています。復興の手助けを続けていきたいですね」と話してくれました。

info/area

【エリア情報】復興や防災にまつわるニュースをお伝えします

「文化複合施設」の整備を進めています

利府町では、図書館、公民館、ホールなどが複合化した「文化複合施設」の整備を進めています。東日本大震災では、地域コミュニティや連帯感の重要性を改めて認識することとなりました。今後は「文化複合施設」を中心に、住民の生涯学習、文化・芸術活動、読書活動などを支援しながら、人との絆や地域との絆を強化する交流拠点を目指していきます。施設は第1期・第2期と段階的に整備を進める計画で、第1期の完成は、平成32年度の予定です。

問 022-767-2197（利府町 文化複合施設推進室）

第40回松島かき祭り

震災の翌年も中止することなく、地域再生への願いと、多くの方々からいただいた支援に感謝を込めて毎年開催してきた「松島かき祭り」を来年も開催します。松島の冬の味覚「かき」をぜひ堪能してください。

- 日時：平成30年2月4日（日）
- 場所：松島公園　第5駐車場（予定）
  詳細はHPにてご確認ください。
  http://www.matsushima-kanko.com

問 022-354-2618（松島観光協会）

今月のガイド

松島島巡り観光船企業組合理事
五大堂営業所 所長

鈴木 丈洋（すずき たけひろ）さん

「お客さまからの『また来たい、ありがとう』の言葉が明日の活力になっています」と話すのは、今回「語り部クルーズ」で語り部をしてくれた鈴木さんです。

震災の年の4月29日、「松島から復興の声を届けたい」と観光船は一部の運航を再開。「多くのボランティアの人たちが乗りに来てくれて『ありがとう』と言ってくださるんです。感謝するのはこちらの方なのに」。当時の状況を聞かれることが多く、語り部クルーズが開始されました。

観光船はつながる場だと鈴木さんは言います。「親と来ていた子が成長してデートで来て、結婚して夫婦で来て、子どもと来る。震災の記憶もずっと後世に残していきたいですね」。

記者の視点

「松島の月」に魅了、飾らない魅力に注目
復興を目指す観光地

松島湾に上る月

物理学者アルベルト・アインシュタイン博士が松島を訪問したときの逸話が残る。1922年のこと。

湾に上る月を見た博士。「おお月が、おお月が」と言って身動きひとつせず、「どんな名工の絵でも、どんな精巧な写真でもこういう自然の美は見られない」と語った―と当時の河北新報の記事にある。

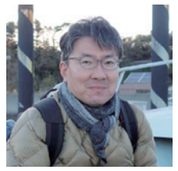
どの時代の人も「松島の月」に魅了されてしまう。記者もその1人。満月の夜に何度か、松島町の観瀾亭を訪ね、和室に座り、月に照らされた島々や海、浮かぶ船を眺めた。

月が上がってすぐの海面は金色に輝く。「金波」と呼ぶ。月がもっと高い位置に来ると水面が銀色になる。「銀波」という。それを見る。「なんてぜいたくな時間」と独りごちた。

日本三景・松島はあまりに有名な観光地だが、景観や歴史・文化、食、なりわいを見詰め直せば「飾らない松島」の魅力が見えてくる。そう考えて、松島町は観光ブランドを再構築する事業を進めている。

東日本大震災からの観光復興を期す町にとって、幾つかの節目がある。国宝の瑞巌寺が来年6月、「平成の大修理」を終えて落慶法要を営む。閉館したマリンピア松島水族館の跡地活用は集客・体験型施設の整備案が採用され、2020年春のオープンを見込む。

変わることのない本質的な部分を忘れず、新しく変化を続けているものを取り入れる―。松島の今後を占うキーワードになりそうな「不易流行」の精神を説いたのは、松島に憧れ続けた松尾芭蕉だった。



筆者プロフィール

河北新報社塩釜支局

山野 公寛（やまの きみひろ）さん

1967年生まれ、東京都出身。
92年入社、塩釜支局。

NOW IS. 防災

伝えることが防災につながる

宮城県各地で行われている防災・減災の取り組みから、日々の備えに生かせるヒントを探していきます。

東日本大震災から時間が経過するとともに、防災意識が少しずつ薄れ、震災を知らない子どもたちも増えてきました。被災体験や教訓を後世に伝えることは、災害への備えにもつながります。今回は、石巻で震災の記憶や教訓を未来につなぐ活動を続ける「みらいサポート石巻」の取り組みから、震災伝承について考えてみましょう。

震災伝承のヒント

1 地域を知る人の言葉を大切に！

親や祖父母、長く地域に暮らす人の被災経験は、今後の防災に生きてきます。災害が起きたときの安全な避難手段・場所、連絡方法など、震災を経験した人だからこそ分かる教訓に耳を傾け、家族で話し合ってみましょう。

2 被災地に行き想像力を働かせよう！

被災地に足を運び、自分の目で被災地の今を見てみましょう。実際に現場に立ち、語り部の方の話を聞いたり、被災時の写真を見たりすることで「自分だったらどうする？」と想像して考えることが大切です。

未来への教訓をつなぐ
“みらいサポート石巻”

震災展示スペース「南浜つなぐ館」を運営。語り部の方が被災体験や教訓を伝える「震災伝承プログラム」の実施や、石巻の被害状況、過去・現在・未来を体感するアプリ「石巻津波伝承AR」を活用した街歩きも実施しています。

【取材協力】
みらいサポート石巻　中川 政治（なかがわ まさはる）さん

東日本大震災発生後「みらいサポート石巻」の前身団体の設立に携わり、現在は専務理事として、伝承の担い手をつなぐ活動に従事。

〈お知らせ〉

祈念公園や震災遺構などの震災伝承拠点を結ぶ広域連携ネットワーク「3.11メモリアルネットワーク」をサポート。会員や、活動を支える寄付を募集中。詳しくは事務局（090-9407-3125）までお問合せください。

凹んでる場合じゃない。待っててくれる人のところに行かなくちゃ。

画像提供：（一社）松島観光協会

（上）平成23年「松島流灯会 海の盆」の様子。
（左）創業70年の「むとう屋」。松島五大堂の向かいに佇む。
（右）「酒屋だけど子どもにも来てもらいたい」と、オリジナルサイダーも展開。

“あの人がいるから行こう”って思われる場所になったら最高

平成23年3月11日。東日本大震災が起こったその日、佐々木さんは仙台市内の飲食店にお酒を納めていたそうです。「とりあえず車で帰ろうとしましたが、信号が止まっていたせいで全然車が動かなくて。7時間かけて松島に帰り、その日はとりあえず避難所に向かいました」。翌朝、店に向かった佐々木さんが目にしたものは、水に浸かり、めちゃくちゃになった店内。「もう、どうしよう…としか言えない状況で、何から手を付けたらいいかわかりませんでした。商売も再開できるのかどうかもわからなくて…。でも、そんなある日、あるホテルの支配人に言われたんです。『むとう屋さんが動いてくれなかったら、うちはどこからお酒を仕入れたらいいの?』って。それで目が覚めた感じになりました。凹んでる場合じゃない、お客さんのところに届けなくちゃ、って」。佐々木さんは、がむしゃらに走り、お酒を集めてお客さんのところへ届けて回りました。

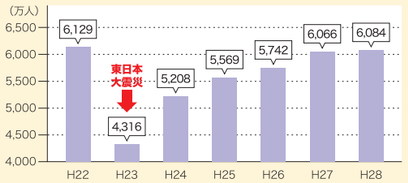
震災を経て、改めて松島という場所で商売をし、生きていくことを意識した佐々木さん。「そんなとき、松華堂（菓子店）の伸ちゃん（千葉伸一さん）から声をかけてもらって、夏まつりの実行委員の仲間に入れてもらったんです」。それまで15万人もの観光客を集めていた「松島灯籠流し花火大会」の中止が決定され、松島で暮らし、ここを愛する人たちが「今の自分たちにできることを」と立ち上がったのです。

「まず、自分たちが好きになれるお祭りにしたい、というのが根底にありました。人を大勢呼ぶのではなく、地元の人たちが楽しめるもの。そして、東京とかで働いてて、里帰りした人たちが”あ、これが松島だよね”っていえる環境づくりがしたかったんです」。こうして始まったのが、「松島流灯会 海の盆」でした。海岸広場に櫓を組んで盆踊りを踊ったり、太鼓が鳴り響いたり。まわりでは昔懐かしい縁日が並び、金魚すくいや射的に興じる大人と子どもの笑い声が響いたり…。懐かしくて、優しい夏祭りは、大成功となりました。

「地元の高校生が灯籠づくりを手伝ってくれたり、ダンス部がパフォーマンスしてくれたり、地元の人たちの手づくりだからこそ、”すごくいい”って言ってくださる方が多かったんだと思います」。そして、佐々木さんは言います。「松島って、やはり日本三景というところに胡坐（あぐら）をかいてきたようなところもあると思うんです。でも、これからはそんなのは通用しない。商売は商品よりも人だと思っているんです。それって、地域にもあてはまるな、と思って。松島も”あの人がいるから行こう”って思われる場所になったら最高ですよね」。

風光明媚な景色だけでなく、地元を思うアツい人たちがいる場所。それが松島なのです。

県内の観光客入込数推移



出典：観光統計概要（平成28年）

PROFILE

むとう屋

佐々木（ささき） 憲作（けんさく）さん

1979年松島町生まれ。仙台市内の飲料メーカーに勤めた後、30歳で祖父が創業した「むとう屋」の若旦那に。松島の風土とともに酒を楽しんでもらいたいと、さまざまなイベントを企画している。

NOW IS. vol.20（ナウイズ）
発行：平成29年12月11日　宮城県震災復興本部（事務局：震災復興推進課）
〒980-8570　宮城県仙台市青葉区本町3丁目8番1号
Tel：022-211-2443　Fax：022-211-2493
『復興情報発信プロジェクト NOW IS.』は、宮城の復興の「いま」を伝えるプロジェクトです。
宮城県 Miyagi Prefectural Government

INFORMATION from MIYAGI

〔宮城県からのお知らせ〕

01 事業者向け二重債務などの相談窓口

震災により大きな被害を受けた事業者を対象に、支援施策の紹介や事業計画の策定支援、二重債務問題への対応などを行っています。中小企業者のほか、小規模事業者、農林水産・医療福祉事業者など幅広く相談を受け付けています。
詳しくは、下記へお問い合わせください。

問.宮城県産業復興相談センター
☎.022-722-3858

問.東日本大震災事業者再生支援機構
☎.022-393-8550

問.県商工金融課
☎.022-211-2744

02 宮城県の復興の様子を見てみませんか？

宮城県庁18階にある「東日本大震災復興情報コーナー」では、パネルや記録映像などで震災復興に関する様々な情報を紹介しています。また、クイズに答えながら防災・減災について学べる防災クイズコーナーも設置しています。お近くにおいでの際は、ぜひお立ち寄りください。

【ご利用について】
場所:宮城県庁18階県政広報展示室
開館時間：月～金曜日 午前9時30分から午後4時まで
※休館日：土・日曜・祝日・年末年始（閉庁日）

問.県震災復興推進課
☎.022-211-2443

MEDIA INFORMATION

みやぎ復興情報ポータルサイトはコチラから！

http://www.fukkomiyagi.jp

宮城の復興情報を発信する、「みやぎ復興情報ポータルサイト」を公開しています。復興に関するお知らせや復興の進捗状況、復興に向けた取り組みなどを発信します。

最新情報をブログで！

今月のブログピックアップ

いわたかれん
復興フォト
岩田 華怜

仙台市出身の女優。AKB48を卒業し、被災地の「今」を伝えたいと写真の勉強を始めました。

これまでの被災地訪問は80回を超える岩田さん。「写真」に願いを込めて、月1回被災地の状況を発信しています。今回は南三陸町。南三陸ホテル観洋が震災遺構として保存している「旧高野会館」を訪れました。

宮城発！
元気と食の最新情報
一般社団法人 IkiZen

震災復興に軸足を置き、被災地の企業の販路開拓や商品開発、広報活動支援などを行っています。

このブログでは、被災地企業や団体のさまざまな取り組みを発信しています。今回は「ホヤ」の消費拡大を促したいと、塩竈市に新しくオープンした「ほやほや屋」をご紹介。ホヤの魅力をお伝えします。

詳しくは、「みやぎ復興情報ポータルサイト」内の「NOW IS.復興レポート」をご覧下さい。

●いまを発信！復興みやぎ　SNS「いまを発信！復興みやぎ」では、取材チームが見た被災地のいまを発信しています。皆さまからの投稿もお待ちしています。ハッシュタグ「#fukkomiyagi」をつけて、撮影した画像をお寄せください。

●NOW IS.メールマガジン　NOW IS.の発行日（土日・祝日のときは翌平日）にメールでお知らせします。 NOW IS.メールマガジン で検索して登録！

取材こぼれ話 Voice from STAFF

MOLA MOLA CAFE

MOLA MOLA CAFEは、ベトナムの川沿いの町「ホイアン」をイメージして塗られた黄色い壁が目印です。ホイアンは壁を黄色に塗った建物が並び、ユネスコ世界文化遺産に登録されています。店内はホイアンから買った提灯などが飾られ、コーヒーはベトナムや東ティモールの豆などアジアの豆を使用しています。海を眺めながらコーヒーを飲み、どことなくノスタルジックな気分になる、そんなカフェです。

宮城県の東日本大震災死者数（関連死含む） 10,563人 | 行方不明者数 1,227人　平成29年10月31日現在宮城県危機対策課調べ

Vol. 20
December, 2017
ナウイズ
毎月11日発行

宮城は現在(いま)も
現実(いま)に
立ち向かう。

NOW IS.

むとう屋
佐々木 憲作

大好きな松島のために、できることを。

日本三景のひとつとして、日本全国はもとより、世界中からも多くの観光客が訪れる松島。ここで、こだわりの日本酒を販売する人気の酒店が創業70年になる「むとう屋」です。

「むとう屋」の若旦那として、元気いっぱいに店を切り盛りしている佐々木憲作さんは、震災をきっかけに"街づくり"について深く考えるようになったといいます。そして、松島に暮らし、松島を愛する人たちと一緒に「松島流灯会 海の盆」を企画。手作りの、どこかノスタルジックな雰囲気の祭りには、地元の人たちを中心に多くの人たちが集まります。

「まず、自分たちが行動しないと」。佐々木さんは、大好きな松島のために、これからも走り続けます。